

# 道徳教育共同研究部会報告

パフォーマンスとコンピテンシーの関係から見た道徳科の評価について

吉田 誠（山形大学地域教育文化学部）

## 1. 道徳科の学習におけるパフォーマンスとコンピテンシー

『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』では道徳科の評価について、教師は「それぞれの授業における指導のねらいとの関わりにおいて、児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を様々な方法で捉えて、個々の児童の成長を促すとともに、それによって自らの指導を評価し、改善に努めることが大切である」（p.108）とされている。その一方で、「学習活動における児童の具体的な取組状況を、一定のまとまりの中で、児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を適切に設定しつつ、学習活動全体を通して見取ること」および「個々の内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価とすること」も求められている（p.110）。

以上を踏まえて、学校現場では道徳科の評価文の構成要素として、①一定の期間に行われる複数の道徳科の授業において子どもに共通に見られる学習状況を捉えた大きくくりなまとまりを踏まえた評価と、②特定の道徳科の授業において見られた特に印象的な子どもの発言や態度、ワークシートへの記述などとそれに対する教師の捉えを示した評価を含めることが一般的になりつつある。

そして、学習状況を捉えるに際して、『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』では「特に、学習活動において児童が道徳的価値やそれらに関わる諸事象について他者の考え方や議論に触れ、自律的に思考する中で、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視することが重要である」とされている（p.110）。そして、「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているか」という点については、捉え方の例として、「道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉え考えようとしていること」、「自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしていること」、「複数の道徳的価値の対立が生じる場面において取り得る行動を多面的・多角的に考えようとしていること」が挙げられている（p.111）。また、「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」については、捉え方の例として、「読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしていること」、「現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直していること」などが挙げられている（p.111）。

例として挙げられたこれらの捉え方は、コンピテンシーとしては抽象度が高く、日常生活での道徳的実践に直結するものではないが、道徳科の授業における子どもの発言や態度、ワークシートへの記述などのパフォーマンスについての一次的な解釈とのつながりは比較的に見だしやすいものである。しかし、初任者のように日常的な子どもの言動を見取って表面的な言動の背景にある思考や感情、意欲、価値観の変容などを読み取る経験が不十分な教師にとっては、複数授業での子どもたちのパフォーマンスとコンピテンシーを結びつけた解釈に共通する学びの姿を「大きくくりなまとまりを踏まえた評価」として捉えることが困難であることが予想される。

そこで、2文構成の評価文を作成する際の視点例を参考にしながら評価文の原案を作成した上で推敲する方法を事例に基づいて示したものを「道徳科 評価文作成のポイント」として作成した。作成した「道徳科 評価文作成のポイント」を次頁以降に示す。

## 道徳科 評価文作成のポイント

### 2文構成の場合

1文目：大きくくりなまとまりを踏まえた評価文：複教授業に共通に見られる学びの姿。外部から観察可能な姿を支える学びの内面的姿勢を具体的に捉えて評価するとよい。

#### 例1

観察可能な姿：じっくり考えてワークシートに書いている。

→内面的姿勢：自分の考えを深めようとしている。

より具体的に：ex)自分の経験と結びつけて

ex)普段の自分の姿を振り返って

→文例：普段の自分の姿を振り返りながら自分の考えを深めていました。

#### 例2

観察可能な姿：グループでの話し合いで積極的に発言している。

→内面的姿勢：問題の解決に貢献しようとしている。

より具体的に：ex)普段の自分たちの姿を振り返って

ex)異なる立場と比較しながら

→文例：普段の自分たちを振り返ったり異なる立場と比較したりしながらグループの話し合いをまとめていました。

### 参考：1文目の評価の視点例

1～4 観察可能な姿（内面的姿勢） a～d より具体的な学びの姿

1. ワークシートに書く姿 (ex.真剣に・じっくり考えて・悩みながら)
  - a. 問題を自分のこととして受けとめて考えている
  - b. 自分の考えを深めたり広げたりしながら考えている
  - c. 自分とは異なる意見や立場にも立ちながら考えている
2. クラス全体に発言する姿 (ex.積極的に・自信をもって・勇気を出して)
  - a. 問題に興味関心をもって取り組んでいる
  - b. 自分の考えのよさをクラスメートに伝えようとしている
  - c. 問題の解決に貢献しようとしている
3. グループワークでの聞く姿 (ex.うなずきながら・考えながら・質問しながら)
  - a. 相手の意見に共感しながら聞いている
  - b. 相手の意見に自分なりに疑問を持って聞いている
  - c. 自分の考えとの類似点・相違点を考えている
  - d. 自分の考えを深めたり広げたりしている
4. グループワークでの話す姿 (ex.積極的に・自信をもって・配慮しながら)
  - a. 自分の意見を率直に話している
  - b. 問題の解決に貢献しようとしている
  - c. 自分とは異なる意見や立場があることを認めている

2文目：1文目の評価を支えるような、特に印象的な授業での発言や態度、ワークシートの記述とそれに対する教師の捉え。

#### 例1

ワークシートの記述：「これから友達の失敗を責めずに声をかけていきたい」

(友達の失敗を責めてしまった→) 友達との関係をよりよくしようとしている

児童生徒の前向きな感情・教師の励ましたい思い：自分を率直に振り返り、前向きに努力しようとしている。応援したい。

→文例：特に「一枚のピース」の授業では「これから友達の失敗を責めずに声をかけていきたい」と率直に振り返って前向きに努力しようとする姿が素敵でした。

#### 例2

授業での姿：グループワークで停職処分を下した運営側の冷徹さに異を唱える仲間の意見に賛同しながらも、規則の大切さや今後の動物園の在り方のアイデアを仲間に伝えた→異なる立場や意見に配慮しながら前向きな意見を伝えている

教師の思い：建設的な調整力が素晴らしい。

→文例：特に「二通の手紙」のグループワークでは、停職処分を下した運営側の冷徹さに異を唱える仲間の意見に賛同しながらも、規則の大切さや今後の動物園の在り方のアイデアを仲間に伝える前向きな調整力が素晴らしいと感じました。

#### 推敲のポイント

①1文目と2文目の内容に整合性があるか（1文目の大きくくりなまとまりを踏まえた評価の内容についての具体的な学びの姿を2文目によって共有できるようにする）

②前向きな学びの姿を児童生徒や保護者と共有できそうか（特に2文目について抽象的な表現をより具体化する）

③道徳性に係る成長を認め、励ます評価文になっているか（他の教科・領域でも見られる評価文になっている場合には道徳科の目標や内容項目と関係づける）

④文字数の過不足がないか（通知表の枠に合わせて調整する）

#### 例1

普段の自分の姿を振り返りながら③自分の考えを深めていました。特に「一枚のピース」の授業では「これから友達の失敗を責めずに声をかけていきたい」と率直に振り返って前向きに努力しようとする姿が素敵でした。

↓

普段の自分の姿を振り返りながらよりよく生きるために自分の考えを深めていました。特に「一枚のピース」の授業では「これから友達の失敗を責めずに声をかけていきたい」と率直に振り返って前向きに努力しようとする姿が素敵でした。（108字）

#### 例2

普段の自分たちを振り返ったり異なる立場と比較したりしながら③グループの話し合いをまとめていました。特に「二通の手紙」のグループワークでは、停職処分を下した運営側の冷徹さに異を唱える仲間

の意見に賛同しながらも、規則の大切さや今後の動物園の在り方のアイデアを仲間に伝える②前向きな調整力が素晴らしいと感じました。

↓

自分たちを振り返ったり異なる立場と比較したりしながら異なる意見に寛容な態度で話し合いをまとめていました。特に「二通の手紙」で停職処分を下す運営側の冷徹さに異を唱える意見に賛同しつつ、規則の大切さや今後の動物園運営のアイデアを伝えていて、**他者の意見を尊重する姿勢**が素晴らしいと感じました。(143字)

## 2. 「大きくくりなまとまりを踏まえた評価」の視点を習得するためのホワイトボード・ミーティング®を用いた教員研修プログラムの作成と試行

道徳科の評価文は「大きくくりなまとまりを踏まえた評価」を行うため、本来は複数授業に共通する子どもの学びの姿に基づいて作成する必要がある。しかし、先に示した「道徳科 評価文作成のポイント」では一つの道徳科の授業で見られた子どもの学びの姿のみに基づいて評価文を作成することも可能となっている。そのため、「道徳科 評価文作成のポイント」に加えて、複数授業に共通に見られる子どもの学びの姿を捉える視点や思考を各教員が習得していくことが課題となる。その際、特定の教員の視点や思考の方法がマニュアル的に伝達されるのではなく、教員一人ひとりの子どもを捉える視点や思考のよさを学び合う形で研修が行われることが望ましいと考えられる。そこで、ホワイトボード・ミーティング®の会議フレームとオープン・クエスチョンを用いて三つの道徳科の授業における子どもの発言や態度、ワークシートへの記述などについて、そこから見取れる学びの姿とそれらに共通する姿や成長の解釈を引き出していきながら、子どもを捉える視点や思考を学び合う方法を検討した。

ホワイトボード・ミーティング®は、株式会社ひとまち代表取締役のちょんせいこ氏が開発したホワイトボードを用いたファシリテーションの技術である。特徴としてまず、9つのオープン・クエスチョンと8つのあいづちを用いて相手の意見や考えを引き出しながらホワイトボードに書きとることで相手の意見や考えを承認できることが挙げられる。そして、ホワイトボードマーカーの色を発散は「黒」、収束は「赤」、活用は「青」と分けて書き、表面的な情報からエピソードまで深めながら意見や考えを書きとることで後からホワイトボードを見た人にも情報や情景の共有が可能となることも挙げられる。

今回は、ホワイトボード・ミーティング®の6つの会議フレームの一つである企画会議のフレームをベースに道徳科評価文作成のための視点を身につける教員研修プログラム案を作成し、試行的に実施した。なお、ホワイトボード・ミーティング®は幼稚園から高等学校の教員が自分の職場や学級において無償で実施する場合には自由に行ってよいが、他の学校で実施したり有料で実施したりする場合には株式会社ひとまちの認定講師の資格が必要である点に留意されたい。

まず、事前準備として、複数の道徳科の授業から三つの授業と児童生徒一人を選び、選んだ三つの授業でのその児童生徒の授業中の発言記録やワークシートの記述、板書写真などの資料を持参する。なお、勤務校の外で実施する場合や部外者が関わる場合には児童生徒の個人名が特定されないように配慮することが必要である。今回は、附属小学校3年生で2018年に実施した道徳科の授業での児童の発言やワークシートの記述を匿名にした形でサンプルデータを作成し、そのデータを別の学校の教員に読んでもらった上で、筆者がファシリテーターとなり15分間程度でプログラムを試行した。まず、「発散」として三つの授業での学びの姿について順番にオープン・クエスチョンを用いて黒で書きとっていき、次に「収束」として三つの授業での学びの姿に共通しているところや成長していると思うところ、教師が大

注 下から11行目。幼稚園は、正しくは小学校です。(株式会社ひとまち)

切にしたいと思うところについて赤で追記した。そして「活用」としてこれからどう指導したいか、この児童がどのように考え、行動するようになって欲しいかを青で書きとった上で評価文の基となる形で大きくりなまとまりを踏まえた評価とそれを特に支えていると思われる授業での発言やワークシートの記述を挙げてもらった。

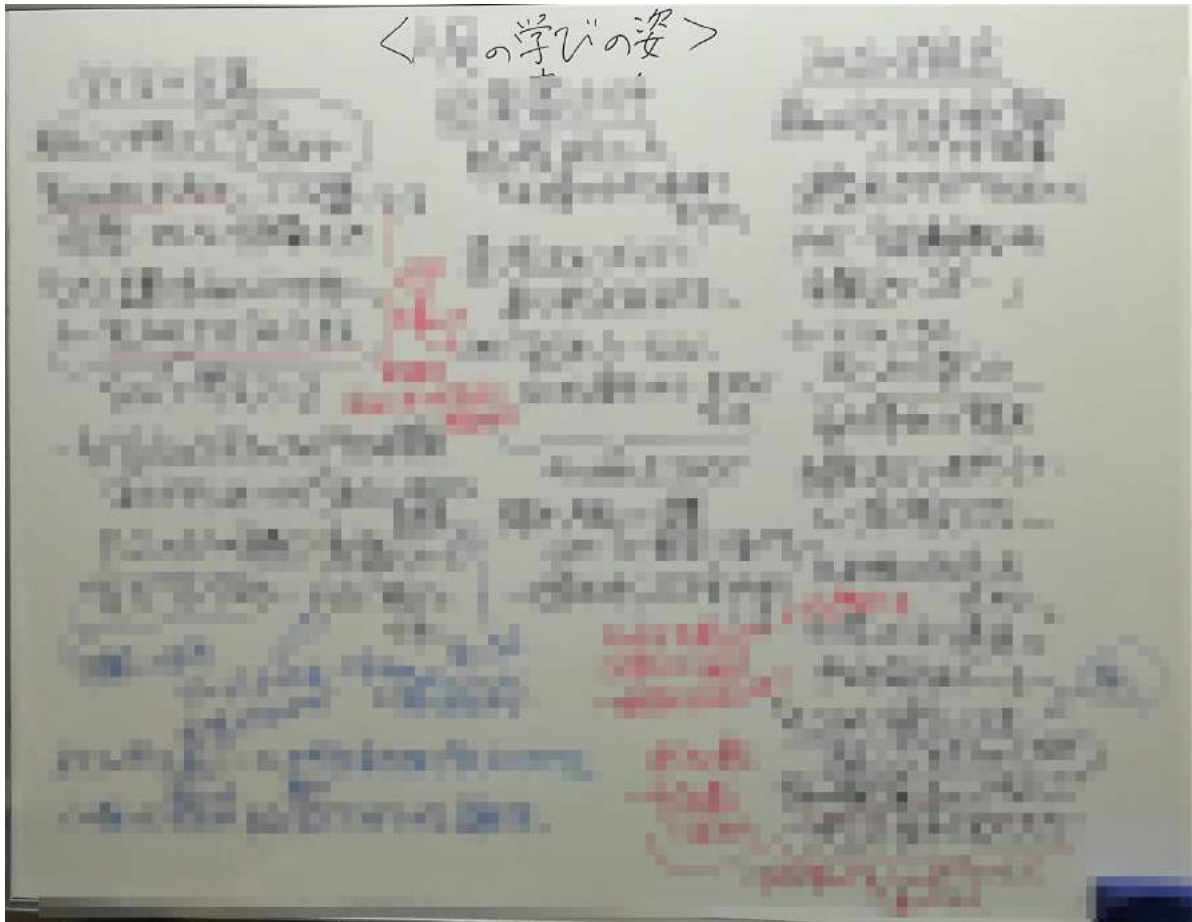


写真1 A児の学びの姿

当初、本プログラム中に2文構成の評価文をホワイトボード上に記述することを想定していたが、きちんとした評価文を構成しようとして用語一つひとつの検討や修正を繰り返しながら記述するため時間がかかるという意見が参加者から出された。実際の評価文を作成する前段階の作業までで評価文を作成するための視点や思考を習得することができることから、本プログラムの試行では評価文を書く前段階までで終了し、ホワイトボードの記録を基に後で評価文を作成してもらう形式に変更した。

写真1の事例であれば、ホワイトボードの記述に基づいて例えば「自分と違うけれどもよいと思った友だちの考えも素直に取り入れて見方や考え方を広げていました。特に『みんなの学級会』の授業では『やってみたら楽しいこともあるしチャレンジは大切にしたい方がよいと思いました』というように違う見方を前向きに捉えられていました。」(124字)という評価文を作成できる。

また、同じ三つの授業について別の児童のワークシートの記述に基づいて実際の授業者である附属小学校の担任にも本プログラムを試行してもらった。この場合には、児童の日常生活での関連するエピソードを踏まえてワークシートの記述の変化を確認できたことで、三つの授業を通した児童の成長がより

注 写真にモザイク処理をしています(株式会社ひとまち)

明確になったと考えられる。なお、道徳科での学びが日常生活の実践に反映されたエピソードが出てきた場合には、道徳科の評価文に道徳科での学習状況を記述し、日常生活での実践については必要に応じて総合所見欄に記述するといった書き分けが必要になる。

写真2の事例であれば、ホワイトボードの記述に基づいて例えば「よりよい学級の雰囲気づくりのために自分にできることを意欲的に考えて実践に移そうとしていました。特に『ぼかぼか言葉』の授業では『自分でよかれと思っていたとしてもちくちく言葉かもしれない』と気づき、相手はどう思うかな？と立ち止まって考えることの大切さに気づけていました。」(133字)という評価文を作成できる。

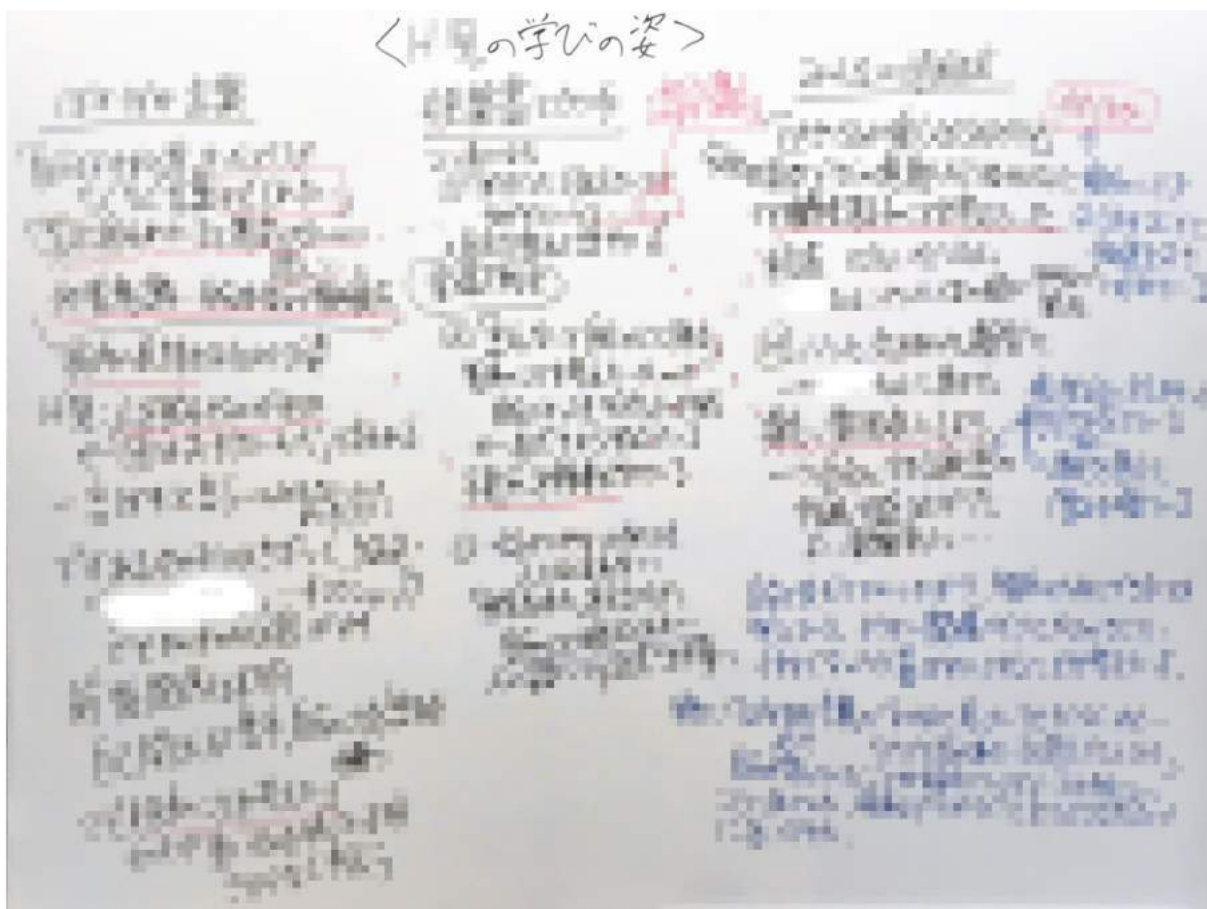


写真2 H児の学びの姿

### 3. 今後の課題

本プログラムによって学びの姿の成長を見取る視点や思考を習得することはある程度可能だと考えられる。しかし、道徳性の成長を捉える視点や思考の習得については、カリキュラム・マネジメントとも関わる問題である。そのため今回のように授業実施後の研修ではなく、カリキュラムの構想段階から道徳性の成長を捉える視点や思考を取り入れる研修が必要である。この点については今後の課題としたい。